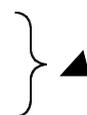


後悔なんて最初から知らない

作詞 J'Soul (浅羽一)

才能なんかドブに捨てて雨に流した  
憧れなんか犬に食わせて牙にさらした  
夢はただ語るだけですら乾いた資格を必要とした  
現実だけを腕に抱いて床に入った  
感触だけを胸に刻んで闇を探った  
幸せは形も知らない幸運の名だと分かっていた  
それが世界の心なのだと 僕は歯車の一つになりながら知っていた  
平等な世界など恵まれた人間が歌った幻想で  
報われぬ願いなど余りにもありふれたつまらぬ言い訳で  
この手の中に握った空気は 今の瞬間を切り取った一部で  
ほらまた聞こえる 一つの椅子に座った者の歓喜の声が  
そして遠ざかる 一つの椅子から落ちた者の<sup>ざんき</sup>慚愧の歌が  
誰かの膝の上で笑う寝顔など 泥に汚れた絵本の中でだけだった



屈辱たちと夜を過ごし月を眺めた  
無力さたちと肩を並べて日々を歩いた  
がむしゃらに腕を振り回し自分の影を振り切ろうとした  
感動などは意味をなくし<sup>すべ</sup>術も忘れた  
羨望などは価値を持たない無駄に染まった  
淋しさの感情ばかりが知らぬ間に色を無くしていた  
決して変わらぬ真理なのだと 世界の片隅でうずくまりながら思っていた  
満たされた世界など<sup>おきなご</sup>盲目の幼子が描いた空想で  
騙し絵の扉から飛び出した皮肉の中で人は生きている  
たった一つのくだらぬ違いが 善と悪との境界になる中で

▲繰り返し

始まりに置いてあるそれぞれの紙が そのまま終わりの場所を記す地図になり  
空から産み落とされた位置で 地中の宝箱までの距離が決まる  
船もないのに 海に囲まれた島で目覚める人もいる

▲繰り返し